第２回　周南市スマートシティ推進協議会　議事要旨

■日　時：令和３年 12 月 10 日（金）17:00～18:30
■場　所：キリンビバレッジ周南総合スポーツセンター　カルチャールーム
■出席者：以下表の通り

所属・団体名	役職	氏名	区分	出欠
東京大学大学院　工学系研究科	教授	羽藤　英二	学識経験者	出席
徳山大学　福祉情報学部	准教授	児玉　満		出席
徳山工業高等専門学校　情報電子工学科	准教授	柳澤　秀明		出席
徳山商工会議所		船井　辰郎	関係団体を代表する者	出席
周南市社会福祉協議会	地域福祉係長	金池　聡志		出席
周南市体育協会	事務局主任	砂田　優一郎		出席
周南市コミュニティ推進連絡協議会	副会長	加藤　洋	コミュニティ組織を代表する者	出席
周南市コミュニティ推進連絡協議会	監事	黒神　充久		出席
山口県未来技術活用統括監		田中　貴光	オブザーバー	出席
周南市 ICT 推進アドバイザー		藤原　孝幸		出席

■要　旨

１．開会
（事務局）
・　ご多忙の中、ご参集いただき感謝する。
・　委員定数について、ただいま委員総数８名中８名の出席をいただいているので、「周南市スマートシティ推進協議会設置要綱」第６条の規定により、本会議は成立していることを報告させていただく。
・　会議の開催にあたり、企画部長の川口よりご挨拶申し上げる。

２．挨拶

（企画部長　川口）

・ 第２回　周南市スマートシティ推進協議会の開催にあたりご挨拶させていただく。本日は全員リアルでの参加ということでお忙しい中、お集りいただき感謝する。
・ 羽藤会長には 13 年前、徳山駅周辺デザイン会議の学識委員として参画していただき、駅周辺整備事業はもとより、周南市のまちづくりにアドバイスをいただいてきた。周南市のことをよくご存知の方である。
・ 前回の協議会ではモデル地区、ワークショップを踏まえた地域課題等について協議していただいた。本日第２回目では、どのような取組方針が考えられるか、今後どのようにスマートシティを進めていくか等を議題とする。皆さまの忌憚のないご意見を賜りたい。

（事務局）

・ 今回から初めて参加される委員が２名いらっしゃる。一言ご挨拶をお願いする。

（周南市体育協会　事務局主任　砂田　優一郎氏）

・ 普段は総合スポーツセンターに勤務している。体育協会なので、スポーツ振興はもちろんであるが、周南市から指定を受け、総合スポーツセンター、陸上競技場、中央緑地、市の体育施設の管理をさせていただいている。市民からご意見ご要望をいただいているので、この場で色んな勉強をさせていたき、市民の方に還元できるようにしたいと思っている。

（周南市社会福祉協議会　地域福祉係長　金池　聡志氏）

・ 社会福祉協議会は、市のまちづくりの地域福祉活動を主に行っている。地域に住んでいる高齢者、障がい者、子供、誰もが住みやすいように、地域福祉の支援をさせていただいている。そのようなところでお役に立てればと考えている。

（事務局）

・ これからの進行は羽藤会長にお願いする。

（会長）

・ それでは第２回周南市スマートシティ推進協議会の議論を始めさせていただく。今日はモデル地区における取組方針（案）、実現に向けたまちづくりの進め方について具体的に議論していく。議題１の説明を事務局からお願いする。

３．議題

（１）モデル地区における取組方針（案）について

＜資料説明＞

（会長）

・ 周陽・遠石地区でのワークショップの結果をまとめたものということだが、地元の感覚からして、もう一声このような点が重要ではないかとか、このような声も出ていた等あれば一言ずついただきたい。だいぶ丁寧に掘り起こしてはいただいているようだが、いかがか。

（委員）

・ この前のワークショップでほぼ集約されていると思う。実際に課題解決に向けて進んでいる事もあるため、色々あるが、基本的に主なものはこれぐらいではないかと思う。

（委員）

・ 大体このようなところだと思う。
・ なお、資料は当日ではなく、できれば予めいただけると目を通せるため、その辺りを改善していただきたい。

（会長）

・ スマートシティを検討する協議会ということもあるが、このようなデータも共有して皆で見られるようになっていくと、意見も出しやすくなる。会議の進め方を工夫していけるとスムーズになると思う。的確なご指摘であった。
・ この部分は前回の振り返りである。データを使って、「歩いて外出しやすく健康的な生活を楽しんでいる」、「遊びや交流、学び等の活動が活発に行われている」、「安全安心な生活環境の中で、安心して活き活きと暮らせる」、という観点で検討を進めていくことを確認した。
・ 議題２の重点プログラム及びデジタル技術の活用（案）についてのご説明をお願いする。

（２）重点プログラム及びデジタル技術の活用（案）について

＜資料説明＞

（会長）

・ 前回よりも具体的に資料を作っていただいているように思う。ポイントの１つは、既存のアプリやデータを使いながら、まずは動き出してみるという提案をいただ

いている。そこを支える技術の動向はきっちりと調べて、適切なものを選んでいきたいというのが案なのかと思った。ただ、地元あってのことであるため、企画や設計、実装、検証はあくまで地域の方々と一緒に進め、そこから考えていくのが基本方針である、という考え方ではないかと思う。ご意見をいただきたい。

（委員）

- 個人的にはなるが、重点プログラム１の歩いて外出しやすく健康的な生活を楽しむまちの「ウォーキングイベント等の通年開催」について、具体的な案になってきているが、ウォーキングイベントを開催したところで、おそらく歩くのが大好きな方はやってみようとなるが、市民全体の健康ということになれば、それ以外の方も取り込むために、ただ歩くだけではなく、歩きながら町にこのような場所があるとか、地元でも知らない場所があるといった創意工夫が必要。色々な層を取り込む取組が必要だと感じた。
- 歩くだけではなく、ここにあるように、例えば血圧が下がった、体重が落ちた等の結果を求める方も中にはいるため、このようなアプリの活用等も必要だと思う。色々な層を取り込むための工夫はどういった取組が必要か、ワークショップ等で詰めていく必要があると思った。
- 重点プログラム２で気になったのだが、「タブレット等を活用した学び、プログラミング教育を促進する」について、デジタルの推進、DX に関わる中で、今後需要が増えていく仕事になってくるため、そのような取組はいいのだが、それに限らず、学校教育以外の学び、例えば、地元企業の仕事を、現地で学ぶことは難しくてもデジタル技術を使って学べる、見学できるといったことをやる。私も小学校の時に課外授業が楽しかったが、プログラミング教育以外でも、学校外での授業をやっていけるといいと思った。
- 重点プログラム３についてだが、野犬については全国ニュースになるくらいである。野犬対策を重点的に取組んでいただきたい。私も子供がいるため、心配である。

（会長）

- 具体的なご意見であった。歩くには何か理由がほしいというところ。周陽地区や遠石地区では防災の関係でトレーニングをやられていたり、掃除を行うと 330 名が出てこられたり、かなりコミュニティの活動が活発である。その時に歩きも必ず出ているはずである。
- 既存の活動にも結び付けていく事が重要である。地域の歴史も深いものがあるため、それを知ってもらうツアーを行う等色々な事が考えられる。

（委員）

・ 身体を動かすということでは、頻繁に社会福祉協議会等が主催して、百歳体操、ラジオ体操を既に行っている。できるだけ多くのお年寄りに来ていただこうということで、来年になるが、小学校の講堂を借りて、ボッチャや輪投げなど、お子さんからお年寄りまで参加していただくイベントを開催予定である。コロナで集まれなかったが、今から来年に向けてそのようなことに取組んでいこうとしている。
・ 私はスマートウォッチを付けているのだが、血中酸素や心拍数等色々測れる。例えばこれらをラジオ体操や百歳体操に参加いただけるお年寄りに貸し、スマートフォンで管理するなどの取組もできるのではないかと思う。色々な取組を既に周陽地区では行っている。

（会長）
・ アップルウォッチで心拍数などが出る。プログラムは今も実施されているので、それを皆で共有して見られるような仕組みを用意すると、少し参加しないかとか、自分の方が歩いている等ができて良さそうである。

（委員）
・ 私は、スマートシティの中で、企業としてどういったものを取り上げていこうかという中で、スマート街路灯に注目している。ソーラータイプのものである。これにセンサーや防犯カメラを付ければ、見守りや気象条件等ありとあらゆるものが管理できる。リチウムイオンバッテリーが内蔵されており、GPS、Wi-Fi、いざという時の USB の取り出し口もある。また緊急の場合、ボタンを押すとコントロール室に連絡が飛んでいく。このようなものが将来的に設置されれば、デジタルを取り入れたまちづくりができるのではないかと思った。

（会長）
・ 街路灯の色一つで犯罪が減るとイギリスで報告されている。情報のハブとして、街路灯を一つのキーにして、地域に置いて、それを使ってみて、試してみるというところが出てくると面白い。周南ならではというところが出てくる。非常にいいご意見である。今後の取組の方向性でも、力点を置く項目として取りあげていく事が重要ではないかと思う。

（委員）
・ 遠石地区も色々なイベントを若いメンバーが企画して行っている。地域食堂ということで、月１回子供やお年寄りに無料でお弁当を配布している。また、朝市のような形で色々な方に出店いただいて、市民センターでちょっとした市を開催し、皆さんに来ていただくという活動を始めている。

- 出てこられる方は大体決まっており、動かれる方は積極的に動かれて、このようなところに来られる方は元気なお年寄りが多い。問題なのは、参加されない方をいかに呼び込むか。市にとっても一番の課題であり、民生委員にとっても課題である。独居老人に動いていただけるようにいかに動機づけができるかが問題である。
- 健康づくりに参加される方はすでに参加されている。そうでない方をいかに動機づけしていくかが当地区においても課題であり、ワークショップでもそのような意見が出ていたのかと思う。
- 夜の道が暗いといった点については、街路灯等を導入すれば、遠石地区と周陽地区は目に見えて明るくなったな、と感じられ解決できる。
- 民生委員や福祉委員の方が抱えている負担を軽減するために、お助け隊のようなものを立ち上げて、有料でお手伝いをさせていただくというのを、社会福祉協議会が中心となってやっている。お手伝いできる方、お手伝いしてほしい方に連絡をいただき、1 時間 100 円程度でやっていただくといった活動も始めている。
- そういうところから徐々に始めて、参加されない方も、何かのイベントがあるのなら行ってみよう、というようにやっていけたら、よくなるのかなと思うので、動機づけが一番問題なのだと思う。

（会長）

- 素晴らしい活動をされている。周南は比較的災害に強い町だが、いざ起こった時に、地域と接点のない方々がどうにもならなくなってしまう。スマートシティの中でも何とか接点を作っていくためにどのようなことができるか、そこが非常にやるべきところだと感じる。

（委員）

- 社会福祉協議会の方で、各地区に地区社協を設置させていただいており、遠石地区では有償ボランティアを行っている。
- 周陽地区では、生活支援体制整備事業の中で、高齢者が住みやすいように地域でどのような支援ができるかを話し合っていただいている。外に出る機会ということで、健康づくりのための百歳体操やラジオ体操等、子供から高齢者まで色々な方が集まれる場所になっている。
- 社会福祉協議会は、サロン活動というかたちで、地域の高齢者の集いの場を推進している。歩いて行ける場所に高齢者が集まれるところを、と取り組んでいるが、現状なかなか歩いて行けなくなってきている。来てほしい方が来られなくなってきている。
- 福祉委員の話が先程あったが、周南市内で 400 人ぐらいの方に見守り活動を中心に活動していただいている。生活の中で独居の高齢者や気になる方を地域の中で

見守っていただくようお願いしている。散歩中に声をかけるといった活動を日頃からしていただいている方も多くいらっしゃる。

（会長）

- 様々な活動をやっていただいているということである。スマートシティとなると、活動をもう少し見える化するということが考えられる。地区でこれぐらいの割合の方が外に出ているとか、活動を活発化することで、もっと出るようになったというのが、地区ごとに見えるようになり、コミュニティ推進連絡協議会でうちの地区はこれだけがんばっているとか、こんなふうにがんばっているという工夫が互いに見えると励みになるし、真似をしたくなる。
- そのようなことがスマートシティでどうできるか。活動が活発なだけに、市民から見てうちの地区はいいなと思ってもらえるような福祉の体重計のようなものをスマートシティの中で作っていけるといいと思った。

（委員）

- 先程の発言の訂正だが、立場上コミュニティの活動を話したのだが、独居老人等に働きかけられればと申し上げたが、スマートシティという大きな目的からは外れているのかもしれないと思った。そこまで取り入れることは難しいのかもしれない。それは別の課題で取り上げるべきなのかもと思った。

（会長）

- 非常にデリケートなテーマでもあるため、拙速にやってしまうと問題が起こるということは十分考えられる。丁寧に考えていくべきだという指摘で、まさにその通りである。

（委員）

- 体育協会としても健康的な生活はアプローチしたいところである。実際に緑地でもたくさんの方が朝早くから夜遅くまで歩かれたり、走られたりしているのを見かける。安心安全に外に出られることが最重要だと考えている。野犬がいるので外に出づらい、夜などはすごく吠えていて、外を歩けるような状況ではない。そのようなところをまず解消し、不安を取り除く必要がある。
- 多くの団体がここを利用されているが、歩き方教室や、ノルディックウォークをそれぞれが開催している。これらの統一的な、コミュニティやつながりが拡がるようなイベント、ここに来ると半日や１日過ごせるといった付加価値を付けられるようなイベントが、定期的に持続可能的に設定できるといいのではないかと思った。
- 我々も、教室を開いているものの、情報発信の仕方が悪いのか、来る人は同じで

ある。外に出る方と出ない方の二極化が激しいと感じている。先程から話にある、外に出ない、活発に動かれない方をどう拾い上げて、こちら側に連れて来られるかが大事だと感じた。

・ 資料の健康アプリ等を作るのであれば、もっと多くの方に知ってもらえるような情報発信も必要である。

（会長）

・ 問題が同じだというところで、皆さん非常に共感されている。
・ アプリの使い方から含めてレクチャーする事も大事だと思う。

（委員）

・ すでにあるアプリを単にインストールしてもらってもなかなか利用が進まない。イベントとどう関連付けてアプリを使ってもらうか、イベント開催時に工夫が必要で、情報をどう集約するかといったシステムの提案を考えていくべきではないかと思った。
・ 今あるアプリでできることやできないこと、また、イベント開催するために必要な情報等が明確になればシステム的なものが提案できるかと思った。

（会長）

・ スマートシティそのものである。色々な活動が行われているものを情報整理して、それが共通のカレンダーや、マップなどで見れる。そこからみんなが参加しやすくなるというところも作れるのではないかということであった。

（委員）

・ 健康アプリは知ってはいるが入れてはいない。知っているが使っていない方は結構いる。スマートフォンに入れなければ利用できないとなると、スマートフォンを使っている世代限定となる。お年寄りはスマートフォンを使っていない人も多い。デジタル技術のアプリを使って何かをするという時には、始めにスマートフォンを使えるようにしないと利用者が限られる。
・ 重点プログラム 3 にあった、しゅうなん通報アプリも気になった。通報アプリを使って、通報して、それに対応するまでの時間が意外と長い。通報したがまだ対応できていないのかという話が聞こえてくる。情報の開示というわけではないが、いつ対応するのか、通報されてから終了したではなく、いつ対応して、いつどういうことをしているといった途中の情報とかも開示されれば利用者が増えると感じた。
・ デジタル技術を使う上では、データ活用の仕方も検討した方がいいかと思った。

（会長）

- 情報を吸い上げるだけになりがちであることに気づかされた。何かをする時には、それをどう使って、どう活用するかの目標値を含めて工夫しながらやっていくことが大切である。
- スマートフォンを持っていても、使っていない層は結構いる。そこから掘り起こしていくというのは一つのいいアイデアだと思った。
- それでは議題 3 スマートシティの実現に向けたまちづくりの進め方について説明をお願いする。

（３）スマートシティの実現に向けたまちづくりの進め方について

＜資料説明＞

（会長）

- スマートシティに向いているもの、向いていないもの、対応できる方とできない方、対応できるが気づいていない方、そのあたりは本日深い意見も出ているし、市の側でご用意いただいた資料の説明の中にも、そのようなことに気を付けていくのを周南市流のスマートシティにしたいという、そのような進め方のご提案なのかと思った。
- 一方で、技術的な話もある。

（オブザーバー）

- データをどう活用していくかという中で、スマートシティを推進していくためのデータ連携基盤は今後必要になってくると思う。ただ、それを、周南市で全て作るのではなく、いかに他の自治体のデータ連携基盤と連携し活用していくかという形で構成される。
- データを全て蓄積するというよりは、どこにその情報があり、どう活用出来るのかが重要になってくる。それを見据えた上でデータ連携基盤を考える必要がある。
- 県でも、今年度、Y-BASE の拠点機能として、検証ができるクラウドの基盤を作っており、データが連携できるプラットフォームを実装しているところである。
- 今後周南市で取り組まれる課題の中で、データ連携基盤を使いながら、例えば県が持っている情報等とどのように連携できるかを検討していけると良いと思った。

（オブザーバー）

- 設定されている利用者像以外の方で、地域を支えている方や外出できない方など、色々な方がいるので、そのような方々に対しても、デジタル技術を活用して、取り組まれている事をサポートできないかや、活動を可視化したり、データを蓄積したりすることにより、他の取り込まれているものと掛け合わせて、更に価値が

生まれないかを考えることが大切である。

- 資料の中にもスモールスタートで始めて、サイクルを回しながらパーツを改善していくという内容があった。後出しの意見でいいので、意見がある度に、次のサービスの時にはそのようなものを組み入れていこう、と考えていくことが大切である。また、今は気づいていないが、1年後・2年後に個別の取組が繋がり、それが皆さんにとって良いことになる可能性もある。
- そのように繋がることがあるからこそ、データ連携基盤は必要であると市民や関わる皆さんがリアルに実感できるような動き方をすることが大切である。最初に基盤を考えてしまうと、器はいいがどんな価値があるのか、という点が課題となる。両輪を回しながら、形を作っていくといいと感じている。

（会長）

- 非常に的確なコメントであった。基盤ありきでもなく、でも基盤があるからできることもあるという指摘はまさにその通りである。自治体だけでできることでもないが、自治体でできることもある。
- 私は静岡県ともお付き合いがあるが、バーチャル静岡というデータプラットフォームを整備されており、熱海の土砂災害の時に大活躍した。静岡県の中にデジタルに強い担当者がいて、あらかじめ準備していたことで、どこで被害があり、どの家が流されたのかすぐにわかった。非常に見事であった。備えあればということである。
- 周南市でも、今起きている問題だけではなく、あらかじめ基盤があるから何か起こった後にできることもある。そのようなことは公共ではないとできない。先程の照明などもそうであるが、住民の方々を下支えするようなものを取り入れていただければと思った。
- イメージとしては、プラットフォームは何かあって、そこにデータがどんどん乗っかっていくことで、地元の方々と高専・大学の皆さんが一緒に活動に参加して、楽しめる・動かせるようなプログラムを、今まで参加できていなかった人にも働きかけていく。それをこのプラットフォームでグルグル回していく、という提案かと思った。

（委員）

- データが使えるということは大学としては大変ありがたい。徳山大学は来年度から周南公立大学になり、2年後に情報科学部ができる。データを扱う学部であり、活きたデータはすごく大事になってくる。データを解析したり研究したりするので、そういった取組に当てはまっていくと思うので、是非関わらせていただければと思っている。

（会長）

・ 周南市にそのような学部ができるのは大きな強みである。学生が地域の方々と一緒に活動するというのは、地域の方々も自分達が学生を育てていると感じるし、だから学生にも地元意識が育ってくる。そのような循環が、専門的な学部によって生じるというのは周南の強みになる。
・ 高専も強みであるがどうか。

（委員）

・ 実際のデータを使えるのは学生のやる気のプラスになるし、学生たちの作ったシステムを使ってもらえるのであればモチベーションが上がると思うので、協力できればと思う。

（会長）

・ 心強い協力が得られそうである。是非、周陽・遠石地区に一緒に入っていって、こんな事ができるというのを一緒に作っていけるといい。そこの合意が取れそうで非常に安心した。

（委員）

・ 地元の課題が色々あるが、課題をまず絞って、それをどう先端技術でカバーしていくかが重要だと考える。一番の優先課題を決めて、それに対してどう動いていくかということを検討していただければと思う。

（委員）

・ コミュニティからの問題点等あげられているが、デジタルで課題が解決できるものと、できないものがある。あくまでもスマートシティを推進していくということで考えると、課題を全て網羅することは無理と思う。その辺りの課題の絞り込みも必要であるし、そうしたところから進めていかないと全部が満足するのは難しい。絞り込みが大事かと思った。
・ 周南市ならではのスマートシティ、これが一番いいのかと思っている。

（会長）

・ 大体ご意見が出たと思う。重要な視点が出て来たため、反映していただいて、次に進みたいと思う。

（事務局）

・ 第 3 回目の推進協議会は令和 4 年 2 月 22 日（火）15：00～。場所は周南市役所本庁 1 階多目的室にて開催する。お忙しいとは思うが出席のほどよろしくお願いす

る。

・ 第 2 回周南市スマートシティ推進協議会を閉会する。

以上